

氏 名： 龐 書 勤

学位の種類： 博士(看護学)

学位記番号： 甲第85号

学位授与年月日： 平成21年6月17日

学位授与の要件： 学位規則第4条第1項該当

論文題目： 幼児家庭事故の危険物について養育者の認識を促進する視覚教材の効果

The Effects of a Visual Material to Promote Cognition of Toddler's Caregiver for Hazards in Domestic Injuries

論文審査委員： 主査 片田 範子(兵庫県立大学)

副査 南 裕子(近大姫路大学)

副査 川口 孝泰(筑波大学)

副査 片山 貴文(兵庫県立大学)

論文内容の要旨

[キーワード]

事故、危険物、視覚教材、幼児、中国

[研究の目的]

中国での子ども死亡原因の第一位は事故であり、そのうち幼児の事故の約9割は家庭内で生じている。特に多発されている家庭事故の種類は窒息、中毒、やけど、転落、外傷、感電の6種類である。先行研究において、幼児を持つ養育者が、家庭内の危険物を危険だと認識していないことが明らかになった。本研究では養育者が子どもにとっての危険物を認識することで、安全行動を導くための視覚教材の開発を行った。本研究の目的は、中国における家庭事故の危険物について養育者の認識を促進するために作成した視覚教材を使用し、その効果を検証することとした。

[研究方法]

本研究は、視覚教材の効果を検証することを目的とした準実験研究であり、視覚教材の開発、効果判定のためのツールの開発、信頼と妥当性の検討を含んでいる。

視覚教材の開発に際しては中山（1976）が示した家庭事故のメカニズムとGarzon（2005）による幼児の事故発生の寄与因子を統合させた「家庭事故の発生と要望のモデル」を作成し、家庭事故の中に存在する「環境因子」、子どもの特性から生ずる「こども因子」、環境の中にあるものが相互作用によって危険物に転換する「特定因子」の認識を促す視覚教材を作成した。焦点化する中国において特徴的な家庭事故については文献検索を通し、中国において多発する6種類の事故（窒息、中毒、やけど、転落、外傷、感電）を取り上げ、事故発生メカニズムが視覚を通して理解できるA4の壁掛け式冊子とした。妥当性については受け入れやすさ、有用性、違和感の有無などの観点から、中国で幼児を持つ養育者10名と小児看護師5名へのインタビューを行い確認した。

効果判定を行うための質問紙の開発については、先行研究で開発した「家庭事故の危険物についての養育者の認識を見る尺度（Cognition of Toddlers' Caregivers on Hazards in Domestic Injuries, CTCHDI）」と「家庭内の危険物アセスメントツール」を精練し用いた。CTCHDIについては養育者の1～3歳児の養育者35名を対象として質問紙を配布し、信頼係数0.88を得た。

効果の検証については1～3歳児を持つ養育者を対象として、中国の医療施設の予防保健課において実施した。介入は視聴覚教材の配布とし、それぞれ150名以上の対照群と介入群に分けて協力を求めた。各群への質問紙を2週間間隔で行い、介入群には介入前の質問紙の記入の後、視聴覚教材を配布し、解らない所などへ説明を加えた。2週間後に再来院した際に2回目の質問紙調査を行った。対照群は2週間の間隔を置いて質問紙調査を行い、2回目の回答の後に、視聴覚教材を配布した。

【倫理的配慮】

研究実施については、研究協力者の権利と利益の保護について、書面をもって研究者が説明し、同意を得る、匿名化の遵守、強制の排除などに考慮し、兵庫県立大学看護学部研究倫理委員会での審査を経て行われた。

【研究結果】

研究協力者の条件を満たし、研究に応募した200名の研究協力者に調査用紙を配布しデータ収集を行った。子どもの年齢が12～36ヶ月、かつ記入の不備が無く回答されたものを有効とした。2回の調査用紙配布を行い最終の有効回答数は介入群110部、対照群84部となった。第一回目に得た研究協力者の属性等について2群間に統計的有意差はないことを確認した上で、データ分析を行った。

研究仮説に基づいて得られた結果は、養育者の子どもへの危険物となる可能性への理解の得点は5つの項目（窒息、やけど、転落、外傷、感電）、家庭事故につながるものについて意識するかどうかの得点については3項目（窒息、転落、外傷）、危険物の予測についての認識については中毒の項目以外の5項目（窒息、やけど、転落、外傷、感電）、全体的な認識としては中毒項目以外の

5項目について介入群が対照群より有意に得点が高いことを認めた。また、家庭事故につながる家庭内の危険物の数としては、感電につながる危険物以外の数が介入群が有意に低い結果を示している。ヒヤリハットの数についても一回目と2回目の比較をすると介入群の方が認識している数が増えていることが見られている。

[結 論]

このように、視覚教材は視覚画面の群化効果を反映して、類推する他の危険物の数の減少はヒヤリハット現象への知覚の向上などへ類推効果をもたらしたと判断した。視覚教材としては各項目の特性や得点の配分からさらに工夫を要する必要があることが示唆されたものもあるが、視覚教材は教育背景の高低に関わらず介入群で高得点を示していることなどから、総合的に判断すると有効であると示唆された。予防的介入として、子どもを持つ養育者への教育指導に用いることの有用性を認めた。

限界として、この視覚教材の利用によって実際の事故件数の減少など、事故防止への効果の検証が必要であり、効果の定着性などを含めて検証が必要となる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、中国において緊急課題とされている小児の事故予防にかかわるものである。子どもの事故が最も多く発生する家庭に焦点を当て、1～3歳の子どもを持つ養育者234名を対象に危険物についての認識の実態を明らかにした。調査実施に至るまで、養育者の危険物への認識を高める視覚教材、「家庭事故の危険物についての養育者の認識を測定するツール」と「家庭内の危険物アセスメントツール」を開発した。中国での養育環境は方法についての文化的背景を意識し、親の養育において、子どもの家庭事故への認識を高める必要性を具体的に「理解、知覚、予測」の側面から測定する視点は、保健/医療者が事故予防への介入を行う際に有意義な点であり、将来的にその状態にあった指導へ役立つ可能性がある。対照群では2週間の間をおいての再調査、介入群では視覚教材を用いた介入の実施前後に回答を求めた。その結果、視覚教材は養育者の認識を高め、実際に家庭内の危険物を減少させるのに有用であることが実証された。

視覚教材を用いた簡便なツールは、中国における多人数の受診者へ対応しなければならない予防外来で看護職が用いることの出来るツールとなり得ることなどが伺えた。評価尺度の再項目については、これからさらに精練させていくことが重要であり、今回の結果を通して留意点が明確になったと考える。この点について研究者は既に展望を有していることが審査会で明らかになっている。

主な仮説は検証されたものの、下位仮説については課題が残っているので、論文発表の際にはこの点についての詳細な記述の必要性について指摘があった。龐氏の理論枠組みの妥当性が検証された研究でもあり、研究方法が緻密で、検証の方法として適切であると判定された。家庭事故の危険物についての養育者の認識の変化について「知覚」と「予測」の結果の相関が高いこと、「理解」レベルの得点が低いことについての考察について討議がなされた。得点の低さが持つ意味、対象属性との関係などが重要な意味を持つことが確認された。

今後中国において、子どもの事故を第一歩としながら、健康増進への看護の役割を発展していく人材であると判断した。